

「中学受験生」形成のエスノグラフィー

— “大人”との共在状況におけるコミュニケーション構造 —

岩瀬 令以子（東京大学大学院）

1. 問題設定

昨今、国・私立の中学校を受験しようと試みる、「中学受験生」についての論議が高まっている。中学受験生に関しては、脚光の底にいくつかの分析視角を潜在させているが、それら基底課題のひとつとして「子ども」問題がある。表現の違いはあるものの、大人の側からみても「捉え心地の悪さ」という点では、諸論は共通のシンフォニーを奏でている。

ところで、中学受験生（以下、「中受生」と略記）に対する「捉え心地の悪さ」といった感受性をめぐって問いが設定されたことは未だない。即ち、今やクリシェ化したこの感受性が、あるいはそう形容される現象が、いかにして発生してきているのか（プロセス）、また、そもそもそうしてデジタル的に語ることが、語られる対象たる中受生あるいは状況・社会をいかに展開させているのか（機能）は問うていないのである。さらにいえば、そうしたパタン化したまなざしを浴び「問題」現象中の主体として定位せしめられている中受生の側の主観性・感受性も不問に付されてきた。

こうした問いは、従来の研究が与ってきた方法論では捉えきれないところに設定される。ここで、まなざしが実際に送付される具体的な「共在」状況を分析の組上に上せること、そしてそれを現状密着的に記述するという方法が必要となってくるのである。

そこで、本報告においては、中受生が公共場面において“大人”となす相互作用の様相を考察の対象に据える。具体的には、まず「捉え心地の悪い」中受生が産出されるプロセスをとらえ、次いでそうした中受生が大人との交渉において交わす意味の構造を分析する。そして、それを通して、コミュニケーションの結果＝機能を考察する。そこでは、中受生というここでの事例に限る事なく、子ども全般に通ずる視点に言及することになろう。

2. “中受生”なるものの産出

中受生は、塾通い等の折り、大人と時空を共有する機会をもつ。

通常、他者との共在状況においては、互いの価値＝

マナを尊重する規範が働くのであるが、例外的に他者からの意のままの接近を受ける「オープン・パーソン」としての立場が、ここでみる中受生に相応する。彼らは、対面関係にある大人から視覚上の侵犯を被ったり、意を得ぬコメントを投げられたりするのだ。

ここにみる、大人による中受生世界への一方的な侵入は、通常であれば守られてしかるべき、一状況内に生起する複数のリアリティの枠がないがしろにされ、中受生のリアリティが大人のそれの方へと手繰り寄せられていることを意味する。これは中受生にとって、自己が存するところのリアリティにそのまま没入することを許さぬものであり、逆に絶えず状況について覚醒する契機を孕むものであると言える。

また、大人がなす諸反応の内容に目を向けても、それらが中受生の自己相対化を促すものであることが明らかとなる。大人が既得の知識に基づいてなす反応—耐・辛・苦—は、そもそも中受生の行為及びその行為意志を不問に付しているため、中受生はこれを率直に受け入れることはできない。中受生が自己の行為正当化のために快・楽というフレーズを打ち出したとしても、いや打ち出せば出すほど、大人は意見を却下し、自らに反抗する中受生を、ますます異視していく。中受生は、極めて窮屈な状況におかれている。彼らには強い受験意志がある以上、大人の反応においてそれと〈適応〉することができないのは明らかであるが、同時に〈反抗〉に徹している訳にもいかないのである。かたくなな〈反抗〉はますます自らを、そして同カテゴリーの者たちを、永続的な水掛け論に固着させることになるのだから。受験意志貫徹のための〈非-適応〉そして状況秩序のための〈非-反抗〉—大人の反応によってもたらされた、この抜き差しならぬ状況の打開策の捻出がここにおいて必然の課題となる。

そこで、打開策として彼らが採るに至ったのは、パフォーマンスとしての役柄である。彼らは状況に没入することなく、むしろ状況を認識の上で超越して、未だ対面状況にanchoringしている身体を救助する。言い換えるならば、大人の反応の位相から論理階型をひとつ上昇することとなったのである。

3. メッセージの意味内容

中受生の対応は、一見すると、大人への適応を示しているように見える。中受生が明示的・意識的に発する表示レベルのメッセージは、大人がなす解釈の方へと接近し重複していることを示しているからである。このように、伝達される意味内容を純粋にリテラルによむとするならば、それはまさしく大人が望んだところに他ならず、従って大人にとっての既存の図式（子ども観）は何ら影響を被ることなく温存されることとなる。むしろ、中受生の表明は、大人のリアリティをさらに確証することになろう。

しかしながら、中受生は、メタレベルのメッセージを小出しにするため、受け手としてはメタフォリカルな可能性も考慮せざるを得ない。中受生が発するメタメッセージは、むしろ大人の解釈から遠ざかる方向を示すものであり、先の情報内容とは相矛盾するものである。つまり、中受生の対応は、表示レベルとメタレベルの混乱を来すものであり、受け手に対し、果たしてリテラルによむものかメタフォリカルによむものか、という解釈上の視点の準拠枠の弁別に関して、容易ならぬ課題を突き付けているのである。

さらに注目すべきは、これらの対応はメタフォリカルな表出に過ぎないと正面から指摘されることがない仕掛けになっているということである。なぜなら、元々大人が中受生に送ったのはリテラルな読みの内容に他ならず、したがってそれを演技だとするのは、自己（および自己が拠り所とする関係図式）の否定につながるからである。

中受生にしてみれば、これは本来ならば全面的に没入するに値する基礎フレームから、互いに相矛盾するふたつの方向に移動して、それぞれフレームの異なる複数の自己（役柄）を呈示したに過ぎない。それら移動先のフレームはいずれも、全面的に自己を固着することのないメタフォリカルな世界なのである。

ゆえに、ここにこそ、直接的な批判を避け得る軽やかさをもった存在が現れる。そして、そのようなフレーム移動の軽やかさこそが、大人にとっての「捉え心地の悪い」現実そのものになるのである。

4. 共在状況におけるコミュニケーション構造とその機能

中受生は、表示レベルとメタレベル、この2つの位相の異なる有意味記号をひとくくりのメッセージに混在させることによって、一方では大人のリアリティフレームに近い立場をとり、また他方では、自身が元

々感受していたリアリティをカリカチュアするような、新たなフレームを創出しているのである。中受生が、かくして共在状況において、全面的に自己を没入するに値する役割に、認識上距離を置いて「役柄」を呈示しているのに対し、大人は依然としてそこにanchoringしている身体次元「役割」に照準して批判している——この、現状解釈に際して各々が取っている視点のずれが「捉え心地の悪さ」というあの不協和音を轟かせる基盤にあるといえるのではなかろうか。

しかしながら、ここで改めて状況の視角に置換してみるならば、彼らが見せたフレーム移動は、彼らが存する状況の特性—非対称的な関係性—に順応する現象だとみることができる。彼らは、一方で中受生という個（もしくは集団）としての行為遂行規準の下にあるのだが、他方彼らはそうした行為を否定されるような状況内行為者としての規準の下にもある。彼らは前者のみに没入すること、あるいは後者の在り方に潜在する関係図式の恣意性を正面きって言及すること、これらいずれをも回避することを“上位”たる相手から暗に要請されているのだ。こうしたクロスポイントという位置づけにあって、今現在身体がanchoringしている次元から離脱し、批判を避けつつ意志を表明する「自在に振る舞う自己」を演じる（＝メタフォリカルな世界に帰着する）と考えられる。

ここで考察した中受生の事例は、状況における多層的なリアリティの読みの次元の違いを明らかにするものであった。が、これは、ここでの事例に限ることなく、広く子ども一般にも通ずるのではなかろうか。「人間が相互作用する際に、現実の関係が形成される以前に思想的に組み立てられた関係が前提とされる」という、いわば逆転した現象が、現代社会の一つの特徴として存している。こうしたレディ・メイドの関係性は、たとえ見ず知らずの間柄であったとしても、構造的に上位たるもの（大人）の、下位たるもの（子ども）への接近を疑問なしとし、もって後者が依拠するフレームを揺さぶりリアリティを相対化する。つまり、子どもは、絶えず自らの位置づけに目覚めさせられているのであり、状況に没入しきっているような唯一無二の自己を現すことができず、状況に応じた幾通りもの“自己”＝変幻自在さ＝「捉え心地の悪さ」を呈することとなるのである。

子どもの変幻自在さ・軽やかさ—これをかように関係の系の中で現出するものとみる。とすれば、まなざすことに没入している限り「捉え心地の悪い」ドラマはロングランを更新するばかりであるように思われる。